

諷諭の文章を書かせる(その二)

— 漢文の授業から —

山 本 昭

はじめに

漢文学習の場において、「諷諭の文章」を書かせた試みの報告をしたことがある。(注1) ます、

- ① 李白「春夜宴桃花園序」
- ② 韓愈「雜説」
- ③ 柳宗元「捕蛇者説」
- ④ 劉基「売柑者言」
- ⑤ 范仲淹「岳陽樓記」

の五作品を読んでその感想を書かせ、生徒がどのように受けとめていたかを分析した。②③④の三作品は諷諭の文章である。学習した後にも、諷諭の理解が充分とは言いがたい。そこで、諷諭の文章を書かせることによって諷諭の意味を考えさせようとした。その場合、現在のわれわれが、文章を書くにあたって、漢文から学ぶべき点はないかを考えさせ、それをふまえて「諷諭の文章」を書かせた。だが、言うなれば、書かせる機会を与えすぎなかった。そのときのいくつかの反省をもとに、もう一度諷諭の文章を書かせてみた。時間的制約から不十分なものとなったが、そのあらましを記してみた。

対 象 広島大学附属高校二年生(40名)
単 元 「諷諭の精神」(第一学習社「漢文」下)

作文の目標 「諷諭の文章」を書くことをとおして

- ① 「諷諭」及びその方法を理解する。
- ② 創作の楽しさを味わう。

展 開 () 内は所要時間数を示す。

- 1 「雜説」(韓愈)を読む (2)
- 2 「捕蛇者説」(柳宗元)を読む (4)
- 3 「諷諭の文章」を書く (0.5)

(i) 「諷諭」とは何か——五十嵐力「新文章講話」中の「諷諭法」を援用——

- (ii) 「取材メモ」の指示——テーマとその題材を決める。
4 「新豊折臂翁」(白居易)を読む (2)
- 5 「諷諭の文章」を書く (0.5)

(i) 「構想メモ」の配布——テーマ・題・展開・力点を置くところなど——

- (ii) 原稿用紙の配布——一週間後に提出の指示——
6 単元のまとめ——中国の文学の特質としての諷諭に

ついで、日本のそれとの対比説明——

7 書きあげた「諷諭の文章」を「構想メモ」とともに提出させる。——「カード」に私のコメントを書き、本人に渡す——

8 相互修正をさせる。

(i) 「諷諭の文章」「構想メモ」「カード」をそれぞれに返却する。

(ii) 「諷諭の文章」「構想メモ」を隣のものと同交換させる。

(iii) 所定の「評価・点検表」に、それぞれ記入させる。

(iii) 「評価・点検表」と、私のコメントを書いた「カード」にもとづいて、推敲させる。

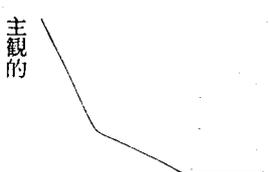
(1)

9 推敲したものから七篇を選んでプリントし、所定の「評価表」に記入させる。(0.5)

以下、作品の読解をおして考えさせた点、書かせるまでの活動、書かせるにあたって留意した点、作品三篇とそれについての生徒の反応、書きおえての生徒の感想などについて述べてみる。

一、作品の読解をおして

白居易の「新豊折臂翁」は詩である。したがって、「雑説」と「捕蛇者説」の二作品の読解をおして考え、確認させた点ということになる。二つの作品は構造の上からみると、それぞれに次のように大きく三つの段落からなる。

	「雑 説」	「捕 蛇 者 説」	叙 述
① 原理	世有伯乐↓不以千里称也。 千里の馬(の出現と)埋没の原理	由来 永州野↓永之人争奔走焉。 永州の捕蛇の由来	客観的 
② 現状	馬之千里者↓安求其能千里也。 千里の馬埋没の現状 △作者の目をおして▽	現状 有蔣氏者↓又安敢毒乎。 捕蛇者の現状(↓郷隣の現状) △蔣氏の目をおして▽	
③ 慨嘆	策之不以其道↓其真不知馬也。 千里の馬埋没の現状への慨嘆 △作者の慨嘆▽	慨嘆 余聞愈悲↓観人風者得焉。 苛斂誅求への慨嘆 △孔子の言葉を証としての作者の慨嘆▽	

「説」とは論理的に説明し、意見を述べる文体である。「諷諭」の方法は間接的説得でもある。「諷諭」の文章は論理的に納得させ

るにとどまらない。読み手を自分の立場にひき入れ、同感させることとでなければならない。ロゴスのみでなくパトスに訴える。二つの

作品は、論理的に述べられておるとともに、読み手の情感に訴えるように組み立てられている。軌を一にしたように、客観的叙述から主観的叙述へと展開している点に注目する。

「諷諭」の方法として、「雑説」と「捕蛇者説」は趣をやや異にする。前者は全篇隠喩で語られる。個別的状况ではなくて、一般的論理として語られる。冒頭の逆説、全篇を貫く否定の論理、現状についての漸層的叙述は、主観を次第にあらわしながら、自己の主張へと引き込んでいく。後者は、そのような切迫した論理の展開はない。個別的状况——郷隣と蔣氏のと生活の対比——を蔣氏の目をとおしてリアルに描く。そこでの漸層的叙述によって状況が強調され、それが作者の慨嘆を迫真性のあるものにする。

「諷諭」は、社会的文学様式である。「雑説」は、作者自身の経歴が投影しているとはいえ、個人的なぐちではない。「捕蛇者説」は言わずもがな、この二篇の作品の主題は、「諷諭」の方法が社会的文学様式であることを端的に示している。一体に、諷刺文学の対象は主として公的なものである。フランスでは諷諭を、政治的な諷諭、宗教・道徳的諷諭、文学上の諷諭、個人的な諷刺の四つに区別する。(注2)はじめの三つは公憤にもとづくが、最後の一つは私憤による。私憤にもとづく諷諭文学が第一級のものになりえないことは論をまたない。中国の「諷諭」の文学は別してパブリックな文学形式である。世界にその比を見ないほどに政治と結びついたこの国の文学の伝統が、それを文学の重要な分野としている。

つまり、「諷諭の文章」を書く視点から、次の点を生徒たちに確認させたことになる。

① 理性と同時に情意に訴えるものであること。そのための方法——たとえば漸層法などが考えられること。

② 「雑説」的方法(全篇隠喩)と「捕蛇者説」的方法(事実+意見)とがあること。

③ パブリックな文学様式であること。

二、書かせるまで

① 個別作業——各自、この二篇の作品について次の点を確認しておく。

ア、書こうとした動機 イ、とりあげた題材、組み立て ウ、表現の方法

② 全体討議——五十風力「新文章講話」中の「諷諭法」を参考にして、意見文と諷諭文とのちがいを考える。

「新文章講話」は、明治以降の日本のレトリックの一つの達成を示しているといわれている。生徒にプリントした「諷諭法」の中心をなす部分は次のとおりである。

「喩ふる者と喩へらるゝ者とが相似(似たり)の関係に表はされたのが直喩、相即(なり)の関係に表はされたのが隠喩、而して其の関係を全く断絶して本義を読者の想像に任せたのが諷諭である。しかしながら表面上関係を断絶するは裏面に於いて更に関係を密にする所以で、其の本義の頭はならざるより、他の説を容れぬ剛復我慢の徒も之れを聞いて我れ知らず納得の首を傾け、諷刺られた者も怒るに怒られずして腹を扶らるゝやうに感ずる。即

ち、諷諭は言を和らげ奥床しくすると共に、透過一層の鋭さを増す効力ある詞姿で、之れを巧みに用ゐれば其の教育感化の上に於ける効力、直諭隱諭の及ばぬ所がある。故に此の詞姿の用ゐらるゝは、殆んど教化、諷刺、若しくは自己の主張をほめかす場合に、限られた趣がある。」(五十嵐力「新文章講話」二三三〜三四〇)

意見文が、事実なり意見なりをストレートに述べるものとすれば、諷諭文は、事実をそのまま述べるのではなくて、他の何かに仮託して筆者の言わんとすることを悟らせる方法である。「新文章講話」の基準からすれば、「雑説」のほうが、諷諭の方法に()できれば、この方法で書いてほしい旨、指示する。)叶ったものといえる。生徒は、自分の生活にもとづく意見文などは余り書いたことがないのか、積極的な発言に乏しく、書かせることのむずかしさを予想させた。

三、書かせる

。字数 八百字以内 鋭い諷諭は短篇のものである。高校生としての表現の完成度、評価の観点などから、この程度の字数を適当とした。

。取材・材料集めのメモ テーマ及びその材料を思いつくまゝに書く。「どうしても書きたい題材であること」「自分でなければ」と自負できるもの」「第三者がインタレストをおこすものであること」に心がける。

。構想メモ 次のような簡単なもので、文章の性質上、自解とも

なるものである。

組 番 氏名 八

テーマ	
題	
展開	構想メモ とくに力点をおくところなど

学年末の限られた時間のなかでの作業であったため、「取材メモ」「構想メモ」の段階での指導なり、生徒の相互修正の時間がどうしてもとれなかった。これは、今回の実践の致命的な点になつたように思う。――

。範例文 七年前の生徒に書かせた諷諭の文章のなかから二篇、「日本靈氣移動説」「右目の世界と左目の世界」(注3)を参考として読んで聞かせる。

。自己評価・自己点検の項目 書くにあたって、あるいは読みかえすときの、次のようなポイントをあらかじめ提示しておいた。

- ① テーマ(明確か、インタレストをおこさせるか)
- ② 材料(テーマにふさわしいものか)
- ③ 構想・構成(論点・材料などが論理的・効果的に配置されているか、段落のまとまり・相互関係など)

「諷諭の精神」と関連させて「諷諭の文章」を書きおえての感想を書いてください。

七篇の文章のうち、6の項目の得点のよかったもの三篇を紹介してみる。

(A)「紙飛行機試験」

昔、中国の山深い地に、今では記録にも残っていない小さな国があった。

その国の官吏登用法は、紙飛行機をつくらせて、飛んだ距離、飛行時間等を計算して、優れた紙飛行機を作った者を合格とした。受験生達は日夜、良い飛行機をつくるために、勉強を続け、予備校に通い、ラジオ講座を聞いた。だが、そんな受験生達も、勉強の合間にもふと不安になった。

「たかが紙きれ一枚で、俺の一生が決められていいものか。人間というものは、そんなものではわかりはしない。俺はいつたい何のために勉強しているのか。俺とは何なのだ。人間は何のために生きているのか。」

しかし、彼にはその重大な考えを具体的な行動に移す事はできない。その勇気がない。なぜなら、彼はそれが社会からの落後である事が十分に理解できるからである。

ふと気づくと彼の右手は鉛筆を持ち、飛行機を飛ばした角度と距

離との公式を導いている。まどの外に隣の部屋の受験生の飛ばした紙飛行機がゆらゆらとすばらしい飛び方をしている。鉛筆を持つ手に自然と力が入る。

外では、さっきの飛行機がまだ、ゆらゆら空気の中を漂っている。人間の本性を無理矢理隠して勉強を続ける人々や、続けさせる人々を、まるでせせら笑うようにゆらゆらと……自由……人間よりもはるかに人間らしく。

評価表から

作者自身は、構想メモに「大学入試が紙きれ一枚で合否が決定されてしまう」と記している。作者の意図は、ほぼ読みとられているが、「受験戦争のみにとどまらず、それに妥協している我々について」あるいは「現在の受験生気質への批判」と書いたものもあり、このほうが読みとしては深い。身近かで明快という反面、平凡だとするものもある。ともに当たっているといえよう。紙飛行機が、「紙きれ一枚」の現実とびつたりしておもしろいとして、材料選択のよさを評価するものと、少ししらじらしいと評価するものとに分かれた。あまりにつきすぎるところがしらじらしいのであろうが、「容易く本旨を曉り得る」諷諭の方法からすれば、肯定的に評価してよい。表現については、よくねられ、心情描写が細かいと肯定的に評価されている。特に最後の「人間よりも人間らしく」と結んだところは、「この作品のテーマにふさわしい。」とする評もかなりみられた。全体的には、高校生らしいテーマ・材料の選択、明快な批判などが多くの生徒に共感を呼んでいる。冒頭の「昔、中国の山奥い地云々」は必要がなくて浮いているという批評もあったが、昔の中

国の熾烈な科挙の試験を連想させる。この作者がはじめに書いた作品は、テーマも表現も甚だ統一がとれていなかった。書き直したこの作品は、テーマと材料の選択によってか、表現も面目を一新している。作者の計算されていないところまで読みとられているといった感じであった。

(B)「イルカに愛を」

一九七八年、米国人歌手O・N・ジョンは、日本のある地方で起きた、イルカの大量虐殺に抗議して、予定していた来日を取りやめた。このことは、全世界に愛と感動の嵐をまき起こした。経済問題で苦境に立たされていた日本は、しばし注意を他にそらせるため、すぐさまこの動きに乗じた。地元住民に耳もかさず、翌年制定された「知的動物保護憲章」においては最も強力な推進国となった。「知的動物」は、はじめイルカに限られていた。一なぜなら、人気歌手が自分の収入を棒に振ってまで抗議した当のものであるからだ。その偉大な行為に比べれば、地元の住民が職を奪われ、たとえ野たれ死にしたとしても問題ではない。しかし、憲章とほぼ同時に発足した、「知的動物保護委員会」によって、保護すべき動物は統々と制定され、地球上の全ての動物が「知的動物」と認定されるまでに三年とはかからなかった。この時、さすがに食糧の問題が起きたが、全人類が肉食主義に切り変えることによって危機を乗りきった。たやすいことだ。愛すればよいのだから。この後に、主に暇をもてあました畜産業者が作った「国際知的動物愛護協会」による「知的動物の存在に関する報告」及び「知的動物保護必要論における問題と解決」が各国に受け入れられるに及んで、人類の「愛」は完

全に解放された。「知的細菌保護法」「知的鉱物保護法」etc. : が制定されるまでに、やはり三年を要さなかった。

そして、「国際知的動物愛護協会」によって提出された解決策——共食い——によって人類が減びるまでにさらに二十年を要さなかったのである。

評価表から

テーマについて、最も多かったのは「行きすぎた動物保護」「欧米の動物愛護への批判」といったものである。生徒の読みとりは、「まちがった愛」「集団によるゆきすぎ」といったものから、「食糧危機の問題」とするものまで幅が広い。内容が飛躍しているせいもあって、(A)の文章に比べると諷諭の明快さという点では一歩をゆずるところであろう。論理的に、スピーディにたたみかけていく構成や表現が効果的でよしとするものがある反面、テンポが速いために飛躍しすぎて現実味に欠け、説得力に乏しいとするものもある。硬い表現で、たたみかけるようくりかえされる点を単調だとするものもあったが、漸層的表現ととらえて、説得の一つの方法とみてもよいところであろう。全体として、実際の事件から話が広がって奇抜でおもしろいのだが、展開が飛躍すぎて現実味を失ったきらいがある。結びの部分をおもしろいとしたものもあったが、反対に大げさで行きすぎたとしたもの、人類滅亡のパターンはありふれて感銘度を殺すとしたもの、ブラック・ユーモア的で諷諭の味わいに乏しいとしたものなど、かなりの批判もみられた。諷諭という点ではすでに述べたとおりではあるが、全体として、個性的といえよう。

(C)「小国多民」

先日、古本屋で見つけた「伝説上の日本」という本を、私は読んでいた。そうしていくうちに、私は、とある太古の国の話に出会った。

「その国は、周りを大きな国々にとり囲まれていました。何も小さい小さな国ではありませんでしたが、その国の人たちは、何にもまして勤勉で、それ故に、周りの国々に伍して、いえ、それらの国々にもまさる繁栄の程を示していました。ただあまりにも多くを他国に依存していたことは、後にこの国の面した問題の重大な一要素となるのでしたけれども。」

さて、前述の地理的問題を別とすれば、この国で問題であったのは、おそらく政治であったでしょう。前にも言いました通り、この国の人たちは、あまりに勤勉でありましたため、壮年期までの人々は、『やるべき仕事』なるものに追われ、政への積極的関心は失なわれていました。結果、政治の大部分は、老人の手にゆだねられていました。彼らの議論は遅々として無益なものばかりで、案件の処理は、時間がかかる上に、結局、自分の考えもなしに多数派に依ってしまい、当初のものより優れようもないのでした。また、そこに、他国依存のための八方美人的要素が加わり、優柔に思える政府でしたが、周りが平和なうちは、大した破綻もなく、国民もその欠点に気づかなかつたのでした。

ところが、そんな折、大国の間に険悪な雰囲気漂いだし、ました。態度を決めえない政府に、国民の政治意識もようやく目ざめは

じめましたが、あまりに遅きに逸していました。そんな状態の内
に、小さな衝突を契機に……」

そのとき、空襲警報のサイレンが響き、私は読みさしの本を置いて家をとび出た。その本は灰になり、その後私は再びその本を見ることはなかった。その後の話は、私の伺い知るところではなくなりました。

評価表から

テーマは、「現代日本の政治の現状及びそれに対する日本人の無関心さへの批判」と書いたところである。作者自身、構想メモに「日本の政治的一面」と書いている。作者自身、構想メモに「漠然としているせいか、「あれこれ漫然としている」・「鋭さに欠けている」と評されているのは、いたしかたないところであろう。本の記述のつづきを想像させるのは、おもしろいとするもの、反対に、最後で肩すかしを食わされた、戦時中のこととしたのは意味がないと否定的評価をくだしたものもある。この作品のおもしろさを決めているのは構成である。しかし、本の内容が漠然としているために諷刺としての鋭さに欠ける。老子の「小国寡民」をもじった題とすることによって、日本の政治を象徴的に言おうとしたのであるが、「日本の政治そのまま諷刺ではない」「ストリートに書きすぎている」と評されているのも半ば当っている。作者自身、書き終ったの感想の中で「結局僕の書いたものは諷刺ではなかったのではないか」と述べている。この生徒がはじめに書いた作品は、もっと直接的な意見文となっていた。問題点はたくさんあるにしても、コメントや相互批評による改稿で、格段によくった点は認めてよ

い。

六、生徒の感想から

評価表の最後の項目として書かせた感想の中から、いくつかを拾いだしてみる。

④ たくさんの問題があるはずだが、題材を決めることができなかった。……毎日のんべんだらりと生きていることをはつきり知らされた。これからは、もっと社会のことについて問題意識をもつて生きなければならぬ。

⑤ 書けと言われて四苦八苦してテーマを探す……現在の状況にあまりにもとつぷりとつかつて批判することを忘れている。このような姿勢こそ批判されるべきだ。

⑥ 意識的に書こうと思っても書けるものではない。書いてみたいというものがあつて、はじめて書けるのではないかと思う。

⑦ 書くとなるとたいへんだが、一回書いてみるとおもしろかったので、ひまなときにもまた書いてみたい。が、そのためには、生活態度を改めねばならないようだ。書こうとするとき、何をどう批判してよいやらわからない。具体的にあまり出て来なかった。諷論文のためだけではないが、考えの対象を明らかにするということをやつていきたい。

⑧ テーマと材料を一致させにくい。ストレートに言うのは簡単だが、それをうらにかくしてわかりやすく言うのには、なかなかいい材料がみつからない。

⑨ このような文章を書きなれていないので、いざ書くとなるときす

がに筆が進まなかった。しかし、それだけに他の文章を書くときにはないおもしろさがあった。作品のよしあしは別として、自分の作品を練り直し、他人の作品を批評することをとおして、いろいろと新しいことを発見できた。ただ、もっと時間のあるときなら、もう少し、ゆつくりと書けたのに――。

⑩ 諷論文は意見文より書きやすいかどうかは知らないけれど、少くとも書いておもしろいと思う。もうすこし時間をかけて、じっくり書きたかった気もする。

⑪ 俳漢文(学習)の中での作文というのものなかなかよかった。原稿はよく書くほうだが、やはり文の形を決められると苦しかった。エッセーが書きたい。

⑫ 諷論文だけではないつくせない部分や、読者の誤解もうけやすいので、意見文もいっしょに書いてみればよかったのではないかととも思う。時間が短かかったので、全体的にみて完成度が低かったのではないかと思う。二枚(八百字)くらいにまとめるには、かなり書きなおしをしていかなくてはと思った。

⑬ 批判精神なくしては人類の向上はのぞめない。諷論という文学形態は、現代、そして今後もたいへん重要なものとなつていくと思ふ。

⑭ 諷論によつて批判するというのは、多くの人により深く自分の批判を理解させるためには必要な要素だと思ふ。

⑮ 諷論は知的レベルの高い人が書き、知的レベルの高い人が読む時、はじめてその役割を果たすのだと思う。作者と読者のレベルが合わないという意味をなさない。

以上要するに、

- ① 諷論文を書くための社会への問題意識・批判精神の欠如への反省
- ② 題材の発見のむずかしさ
- ③ 書くにあたっての時間の不足
- ④ 諷諭のむずかしさとおもしろさ
- ⑤ 諷諭の方法の意味

などが問題としてあげられる。作品の成否は①と②にかかっており、多数の生徒が言及している。④の「むずかしさ」はそのとおりであろうが、一面楽しんで書き、楽しんで読んでいる。遊びの要素が表現意欲を喚起しているのであれば、それに堕さない注意も必要になる。⑤については①②③のように、その方法の意味をよくとらえている反面、言論の自由な日本ではその必要はないと書いた生徒もあった。全体的には、その方法及びその意味は、ほぼ理解されているというところであろう。

七、評価と反省

三学期のあわただしい中、短時間に書かせたために、事中の指導や事後の処理がなされていない。従って形式的評価などについては今後の課題として、目標の①にあげた点のみ重点的に評価するにとどまった。

紙数の関係で三篇のみ、それも、はじめに書いた作品などは紹介できなかった。クラス全体から見ると、相互批評や私のコメントによって、テーマや材料を考え直して改稿したもののが諷諭という面からみれば概してよくなっていることは、他の文種以上にテ

マと材料がその成否を決めているということであろう。

生徒の感想(A)(B)(C)にもあるように、²さあ書けと指示されても、現代社会にとっぶりつかっていはテーマを見つけようがない³というのは実際であろう。それは、特に現在の生徒には著しい。以前、諷諭の文章を書かせたとき(昭和四十七年)の生徒は、まだ学園紛争の名残りといった社会背景もあってか、社会問題への意識はもっと強かった印象をもっている。こういうなかにあっては、もっと長い時間をかけてテーマや材料を温める必要があるであろう。新指導要領からすれば漢文の枠だけでなく現代国語の作文指導の年間計画の中に位置づけられねばならない。そうすれば時間的制約もある程度解消できよう。意見文をステップにして書く、たくさんの人からの批評によって推敲することもできよう。一人の百歩より百人の一步という点からすれば、独善的に過ぎたかもしれない。作文指導の大きな枠の中で再検討してみたい。

八、おわりに―なぜ諷諭の文章か―

作文の機能についてはさまざまな考えかた・分類のしかたがある。たとえば、①楽しませる、②知らせる、③納得させる、④感動させる、⑤行動を起こさせる、といった分類のしかた(注4)に従えば、諷諭の文章はすべてを含む極めて高度な表現活動ということになる。「雑説」のような論理性の濃いものもあれば、「捕蛇者説」のような小説の結構を備えたものもある。一つの作品がすべてを備えているとは限らない。①②③は必須の条件ではないにしても、場合によってはそれをも含む。たとえば「捕蛇者説」は、実質はとも

かく形式的には⑥をも含んでいる。諷諭の文章はきわめて多くの機能にわたる文種といえる。

生徒の感想からみれば、むずかしいが自由に創作できる要素が表現への意欲となつてゐる。パブリックな文学様式であることが、生徒の社会への関心度をふりかえらせもしている。諷諭は中国文学の特質の一つであつて日本の古典文学に乏しい要素でもある。現代の漢文学習には不可欠の分野と考へる。これからの漢文学習は読解の枠にのみ閉じこめられることなく、創造的な面からとらえなおされてこそ、それは真の意味で日本の古典となりうる。漢文学習で積極的に書かせることが少ないなかにあつて、諷諭の文章を読むことから諷諭の文章を書かせることへといつたささやかな試みを報告させていただいた。

注1 「諷諭の文章を書かせる」中国中世文学研究第九号（一九七三年七月）

2 「諷刺文学とユートピア」渡辺一夫・加藤周一

3 注1の文章中に引用した生徒作品

4 森島久雄「現代国語教育序説」二二六頁

（本学附属中・高等学校教諭）